

三井甲之  
詩選



三井甲之  
詩  
選



# 明治天皇御製

歌

明治三十九年

まごころをかぎりなき世にとどむるもやまとことばのいさをなりけり

歌

明治四十一年

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

詞

明治四十三年

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまとことばのたかきしらべを



三井甲之詩選 目次

明治篇

消なば消ぬかに……………	(三)
訳詩 やすみなき恋(ゲーテ)……………	(六)
後の月……………	(九)
蟻の歌……………	(一一)

大正篇

九月十三日……………	(一五)
此の頃の生活……………	(一八)
祖国礼拝……………	(二〇)
春……………	(三六)
祖国主義……………	(四〇)
生命防護……………	(五〇)
『明治天皇御集』拝誦宣言……………	(五八)
沁 刻……………	(六二)

## 昭和篇

- 恩 愛……………(六九)
- 郷土追放……………(八四)
- 神まつる昔の手ぶり……………(一〇二)
- 田代順一兄追悼ののりと……………(一一〇)
- 人生の悲劇・宇宙の歓喜……………(一一七)
- 河村幹雄兄の靈にささぐるのりと……………(一三〇)
- かみこと・み空のこゑ……………(一三九)
- われ万物によりて生く……………(一五二)
- 神洲不滅……………(一五七)

## 戦後篇

- 蓑田胸喜君の靈にささぐるのりと……………(一六七)
- 石にしるすことば……………(一九〇)
- あさ日の光……………(一九二)
- 友 に……………(一九七)

明  
治  
篇



消なば消ぬかに

ともし火消ゆる一つ二つ

車のゆきき人のどよみ

かそけくなりゆく夜くだち

家のつとめいまだ終らず

短かき袖上衣よそほひ

白きたのごひ髪にまとひ

殊勝なるかな汝がいそしみ。

人の手になる飾を捨て

心の光いよよ輝く。

幸あるかな清き心は

若子の自然をつね失はず。

はらから来り汝が手のごひ

取りて捨つれば黙しつ

再び取りあげかうぶりて

散りみだれしを整へつ

狭き屋内に秩序あらしむ。

疲れし腕動かすを見て

汝が肩に手をおき

「いとほし」と吾がいへば

もたげし面わほほゑみて

消なば消ぬかに淡雪の

うつぶす汝<sup>なれ</sup>を目にみれば

差別<sup>けじめ</sup>の世<sup>よ</sup>忘れつ

汝<sup>な</sup>が名よべばかそけきいらへ。

(明治四十年十一月)

やすみなき恋 (ゲートル)

雪に、雨に、

風にい向ひ、

峽はざまのけぶりの中に、

狭霧さぎりわけ、

いやきほひ！いやきほひ！

やすみ無く、静まらず！

むしろ苦により

吾が身過ぎなむ、

人世の歡樂の

ここだくを得むよりは。

心ゆ心ゆ

相したふ、

ああ、いかなればかく

苦の煩はす！

いかに逃のがれむ？

森のかたへか？

すべて甲斐なし！

人生の王冠、

やすみ無き幸福、

愛、汝こそ！

註、是は千七百七十六年五月六日イルメナウ附近の山中に於て作らる。深く感じ居る  
いたましき心は平和と安楽とに就ては何等知るを欲せざる如き時あり。騒擾と戦ひと  
あらしとは斯の如き心の欠くべからざる所也。放たれたる自然力のすさぶ時は自ら之  
にともなひ励まされ勇氣を得たる心地す。そが心の内に波立ち荒るゝ時は外に怒号す  
る暴風雨の狂ふ響も又これに同情するの思あり。かかる時には心臓を鼓動せしめ血を  
漲らしめてきはひ出づる也。ゲーテに於ても亦然り。

我が一生の美しき護符なりといひしシャロットefonシユタインに對する烈しき恋は  
彼を驅りて春のあらしのどよみに狂ひ入らしめたり。彼が彼の愛の苦みと歎びとを荒  
山の吹雪に任せたるもの即ち此の詩なりとす。(明治四十一年三月)

後の月

何地イツチより来コし

われは知らず。

月窓を照らし

木影夢の如し。

俯ウツプしさりし汝ナが姿、

待つ間マもたぬし

心そぞろに。

衣キヌの音なひ

近づくけはひ

月の光も揺るかと思ほゆ。

(明治四十一年十二月)

## 蟻の歌

地上を歩む蟻よ。

汝の歩み得るは一瞬間である。

汝の上に汝の生命を奪はむとして落ち来る自然の足跡は避けられぬ。

ああ踏まれたる蟻よ！

されど踏まれたる時は踏まるることの消滅したる時である。

忘れよ。酔へ。死ね。——

笑ふ声と泣く声とを耳にせざれ。

進め、行け、生き居るかぎりは。

滅びざる第一歩よ。

すでに一歩を行けるものよ。

行きつつ叫べ！

止りてとどま説くことなかれ！

(明治四十五年一月)

大  
正  
篇



九月十三日

細き月あらはれ松かげうすれて暮れゆく空にみともしかがやき、みちのべの篝火よるをしめす。

しづしづと歩み来るはさきのみかどにつかへまつりしつはものの列。

まつをかざしみ旗み弓み楯み鉾、もろもろの供御をありましし日のごと捧げもち今しづしづと歩みつかへまつるももちのつかさ人ら、

つつのひびき！

天ひらき

今いでます

宮居を

さきのみかどは。

かなしみの楽起り

つつのひびきつぎ起り

みくるまは今

み民わがをろがみまつる

まへをすぎさせ給ふ。

かなしきかな

民の心よ

はれたる夜空に

かなしみみちぬ。

さきのみかどは今うつらせ給ふ。

夜の芝生にもだし立てるわかものよ

つつしめるなが上にさちあれよ。

みちのべにみてる民らよ

剣とりつつなめて立つつはものよ

なが心かなしまむ。

遠きむかしのことそぎてちからあるみ魂よ今よみがへれ、

ああわが心かなしなみだのごはむああ。

(大正元年九月)

## 此の頃の生活

このごろは寒くなつて身がひきしまる。

寒いのはいくら寒くてもよい。

吹き飛ばされさうな風にふかれて

明かに澄んだ、乾いた、赤茶色の峽間で、

櫟の葉の色のなかで、秋から冬をすごした僕は、寒をこのむ。

東京も冬になると空気が澄んでくる、

溜つて気になつて居るものは手紙の返事だ。

友よ！

此の一語は僕の今のまことの唯一の叫びだ。

此の世に信を同じうする友があるから、前途の不可測も現在の不自由も、それらは内の歎喜に和げらるる。

(大正四年一月)

## 祖国礼拝

## —

友よ、はらからよ、

さきのみかどのかむあがりましまししとき

暗やみにわれらまでへりき。

そのやみのなかに一すぢの

光は無限の時を貫き

さまよへる

此の世を

すぶべき原理は『日本』なりき。

友らとかくかたりて

さきのみかどのみあとをしたひ

いまのみかどにつかへまつらむと

み民われら心をさだめたりき。

二

歐洲大戦にはかに起り

地図の区劃は忽ち動き

日よりもあかるき文化のともし火

その国々を

うちとより

い照しかがやかし

ひむがしの国日本に

西の国のありさまを

さながらに

見しめつつ、

大波はささ波に

ささ波は大波に

うつり押し進み

全世界の

人とふ人の

心を刺戟す。

三

青山をから山なす

号泣の

民族移動の悲劇を

記録にのこせし

いにしへの

みちよ、

めさめよ

今、大正の大御代に、

ことそぎて

力ある

いにしへの

みちよ、めさめよ。

四

見よ、うねる山脈を、

地平に隠れて

波に沈み

島とあらはる、

見よ、その海原はてしもなく

波につらなる

波のうねりの

律動は、永久の

生命をさながらに

水底に響かする

共鳴の妙音は

忽ちはやさめ

忽ちあらしと

宇宙の力の

交代動乱――

見ゆる怒濤も

やみに没し

声もひびきも

くぐもりかくれ

流れそそぎ

心を失ひおどろくすべてに

光を示す――

原理『日本』。

五

やまとことばに

やまとのいのちを

ともにうたひて

ここにあつまる

友よ、はらからよ、

ともに喜び、悲み、泣き、憤り、

行かなむ、友よ、もろともに、

世界に於ける今の日本は

名もなき民のわれらの上に

押しかけれりと感ずるときに

くしき力ぞわれらにあらむ。

正確の科学にみちびく

力はすなはち此の無限の律動、

避くべからざる、また代ふべからざる

われらの運命——日本の民と生れしことを

まことにみとむる

ここにわきくる確信の

威力を尾羽張劍をはりつるぎにうつして、

打ちてしやまむと、みうたよみせし

いのちを、今よびめさまし

進まむ友よ。

自然をことむく人の力は

いのちの無窮をわすれてたはぶる

享楽の人、楽天の民、たばかりはかりごと、

それらの上に

氷雨とそそぎ

はやちとおそひ

我を忘れ

進まばここに

滅よりわきくる大歓喜は

永久の生命を

現実化す――

芸術よ。

六

海外のまた海上の友よ、

くがを恋ひつつ海にはたらく友らよ、

君のポンプのとまりしときにはよるも休まず繕つくろひし、

島の見ゆるに曇る日晴るるに喜ぶ友よ、

あるひはあらしに船は傾き

怒濤に友は姿を失ひ

記念をとどむるは

空しきその場所と時刻との測定。

港を出でては港にかへり

くがを送りて海原迎へ

世界の各地に祖国のいのちを

まきひろぐる友らよ。

家庭の生活と柔軟の感触とを

無限のいのちにつながらしめ

歌よむ女性よ、

子孫をはぐくむ母の心は

自然に向つてひとしくひらかる。

北樺太きたからふとのみ雪のうへに

けぶりをみとめて歌よむ友よ、

南洋に、南米に、西比利亞シベリアに、瑞西スウイスに、仏蘭西フランスに、

また北米に、印度に、北支那より南支那まで、

朝鮮に、また台湾に、

内地の国々島々に、

勤労と悲哀と奮闘の生活を

永久化する、その歌とうた人よ、

明治大正の大御代の歌は

万葉のそれにもまさり

世界的日本のいのちを

子孫に伝へ世界に示す。

外に輝くあだなる形のほろびむとときに

とはにのこらむその歌とうた人よ。

## 七

海国日本は海の備へを今かためよ。

各自のもちばに職務をつくして

つるぎをとりて立たむと待たむ。

外に秩序の整ふとときに

内に自由の研究起り

国民協力の平等感を

国家社会政策に実現し

集中と分散と分析と綜合と探究と獨創と個人と社会と国家と

はてなき海の八重波の同じきうしほにとけ入る如く

小草の葉末にそよぐ微風の

力もあつめて

人の組織を無限の自然に

とけ入らしめよ。

一切の差別は

ここに消え

のこる名はただ原理「日本」。

## 八

外に示さるる差別を内に

すぶるはやすまはずはたらく力ぞ。

作業の律と心のうごきと

疲労と休養と

昼夜の変化と男女の補足と

一切の開展を分てばここに労作ろうさきの世界、

統ぶればここに国家の威力。

まなこを無心の自然にそそぎ

平時戦時のけじめもあらぬ

争闘の生に

形をあたへよ、うた人よ。

苦痛も悲哀もよろこびも

ともに流れてとどまらず

空ゆく雲の動きてやまず

空ふく風の目にもとまらず  
ここに戦たたかの無上命令。

## 九

天上の極楽は

内心に、

瞑想の観念は

現実に、

日本の地に

日本のことばに

われらの行ひに

今うたば吉よらしと

不断の準備と覚悟と

組織と秩序と訓練と

それを内に統ぶる

国民宗教原理『日本』。

ああ、日本よ、

五官と思想との現実的対象日本よ。

ああ、祖国日本よ。

われらは祖国日本を礼拝す。

(大正七年一月)

## 春

—

春が来た。

土がうるほひ

空気もしめり

水かさもまし

草木も芽を出し

ものみなさかゆるに、

わがところは

不断のうれひをはなれ得ぬか。

うれひの底ひに

とこしへの春は、

不可思議のいのちを

うけつぎつたふる

歴史をしめすか。

二

歴史をしめす芸術は

青春の恋より生れて

老いざる国家の生命に流れ入る。

恋と祖国と

その中間にゆるるくさぐさのわざ

それらのもつれに

苦しむときに

われらは心のすみかにかへる――

鑑賞の標準を同じうする

同信の友の心の世界に。

三

恋のゑまひより

戦のをたけびに、

わかれを悲み

ふるさとをたちいでし

ますらをの歌を、

万葉の東歌を

今くりかへし

ふたたびうたへ。  
あだは四方に  
せまり来るに。

(大正七年四月)

## 祖國主義

## 一

友よ、友らよ、

出征軍人の故郷をよぎりて

君の目に、また耳に入りし

かなしき、くるしき、されどををしき物語、

徴発軍馬にわかるるをのこの

まなこの涙は心のちから。

母には死なれしみどりごいだき、汽車にのりにし出征兵士の、その児をもらひし見  
しらぬ人よ。

わが身の救はことわりて、出征兵士の家族をたすけし貧しき人々。  
悲劇より生るる祖国のいのちは

永久に

子孫の胸に

くちぎる力と

なりてつたはらむ。

目にこそ見えねど

疑ふなかれ

この力を、

政治家よ、

身をすてて祖国につくすべき

時は今なり、

疑ふなかれ

ただ信ぜよ

内、はらからに向ひては。

二

国の外には、荒波よする大海原の

波動をすぶるは物理原則、

兎の毛のさきを七たびさきて

くはしくはかれ、

外交官らよ、

人類の歴史は、一つの言葉にこをつつむれば、  
すなはち悲劇。

三

外つ国の大地をふみて行軍するわが兵士らの歩調をききつつ、またわが兵士を乗せ  
てすすみ来る列車の汽笛に、轟く胸をおさへつつ、涙にまなこくもらせし、友の  
心の緊張よ、

通過兵士の汽車よりおりて

はがきしたたむるさまを写真に取りて

おくり来し友よ、また

貨車中の炊事のはたらきを

駐屯軍の進行を

輸送の大砲を

うつしておくりし友よ、

西ベリアの

空をながめて

何を思ふ。

松花江の鉄橋は

今我が兵に守備せらるると

沖、横川の二人の志士の

みたまにつげむとする心は

一人の友の心にあらず。

#### 四

警報の無線電信うけとりて

海図の上に

敵のありかのしるしをつけ、

船橋せんけうにいそぎのぼりて

ながむれば

護衛の船に見ゆる

信号旗、

信号は、『速力まして引きかへし、見はり厳しくいましめよ』といふ。

たちまちうづまく黒けぶり吐き出す煙突、

船ぬちふるひて、速力ましぬ。

手にとるめがねに見はる海原、

あをくたたへぬ。

砲員はもちばにつきて

敵こそ見えなば

うち沈めむと

見まもる海原。

このとき身内にみなぎる力は

祖国にかよはむ、

祖国をはなれて、とほくかなたの  
地中海の戦場にはたらく友らよ。

## 五

『スキロの島をわが船めぐる』と  
カイロのけしきのゑはがきに  
しるせしうたよ、

生死のあひだにうたよむ友よ、  
船長よ、

その武士的修養よ。

## 六

祖国に、また世界各地に

ひろぐるはらからとともに祖国のためにかくこそ念せむ、  
公共心は

道德生活の基礎にして、

法制を最後のよりどころとすれば

内にはらからあひせめぎて

あだは外より祖国にせまらむ。

法官、弁護士らよ、

思へ、道德生活は国家威力の実内容なることを。

教育家、道德論者らよ、

生死のちまたにのぞみしときの心の緊張に、すなはち宗教的感激に、とけ入らしめ

よ、道德生活を。

祖国を去りても

胸にはうかぶ

祖国の面影、

見ゆる現実、

見えざる信海、

「発願ほつぐわんは決意生活、執持しふちは自信生活、

信樂しんげうこそは同信生活と、

三機を分つ心理分析、

親鸞はかくこそ説きし』と

つぐる友よ、

ああ楽しきわれらの同信同朋生活。

ここに本体的先驗自我

一切の仮定

一切の妄想

ひとしく消え、

たのみの杖はなげすてられ、

無窮の宇宙に見いだすわが身を

よするは

祖国の

無窮のいのちの

現実的歴史的開展。

(大正七年十月)

## 生命防護

いますやくくとねむれる子よ。

なれはみつめき父の面わを、

言なくみひらくたゆげのままに、

われはおもひき、——

親子はらからみなやみて

なれのみ病ひあつしくなりて

あはれなるかな、ながそのまみよ。

なれの世界は、今ただ父の面わか、

母もふし、兄もふして、

なれをみとるはただ父ばかり、

なれの病ひのただならざるに、

われはひとり

庭の木々を

あけがたのしづけき空を

ながめつつ

涙ながしき、

全力を

つくして

なれを救はむと

心をさだめて

病室に

われ入りて、

ながそばを

はなれず

みとる

よるもひるも。

はむいひも

はみあへず

われはなれに

よりそひて

苦痛の時を

すぐさしめむと、

ねよとのうたを

うたひて

手をとる。

わがいのち

なれにかよへと

おもひをはする

汝なれの世界に。

ああきよき

されどいとけなき

なれの生よ。

なれのまだ見ぬ世界をしぬび

父もまだ見ぬ世界をしぬび

春の花

夏の青葉

秋のもみぢ葉

冬のゐろりべ、

またはひろき

野原をたどり

海べをさまよひ

夢幻の世界を

心にゑがき、

熱になやむ

なれにすがしき

音律の

世界を与ふと

わがうたふ

ねよとのうたを、

われとなれとの

二人の世界に

われはうたふ。

刻々に

乱るる脈搏

変る面わ

悪寒戦慄

高熱面暄

たちまち

鬱血状態——  
うっけつ

カンフル注射

酸素吸入、

ちひさき

なれの

このたたかひを

けなげなるよと

みつつみとりす

われの心は

緊張し

よるもひるも

わすれて

ころものひももとかず  
われはなれの  
いのちをまもる。

(大正九年)

## 『明治天皇御集』 拝誦宣言

明治天皇神あがりましましたし時、われら驚き目さめしめられ、われら国民のつとめ  
いよいよ重しと気づかしめられたのである。大正三年世界大戦はじまり、同じき年の  
対独宣戦は戦争開展に於ける世界勢力關係を支配する重要条件を決定し、大正八年ウ  
エルサイユ平和条約成りて、技術武器中心の戦争は思想言論中心の戦争によつて延長  
補足せられ、大正十年皇太子殿下摂政に任せられさせ給ひ、同じき年ワシントン会議  
開かれ、国際思想戦はその終結に導かれ、諸国の主権に關係する重大の軍備制限条約  
成り、大正十二年九月一日東京を中心として、大震災につぐに大火災をもつてして、  
その破壊の威力世界を驚かし、その惨状世界大戦々場のそれに比較せられ、ここに破  
滅没落より創造革新への復興原理を求め、国民思想の趨向を反省せしめられしが、か

しこくも同じき年十一月十日国民精神しんき振作の詔書をくださせ給うたのである。

われら明治の御代にはぐくまれ大正の御代に国民の責務を分担するもの、如何なる精神原理及び思想信仰によつて各個人及び全国民生活をみちびくべきか。われらは信ず、われらはわれらの祖国日本を礼拝すべしと。われらは信ず、祖国日本の精神はかしくも明治天皇の大御心にすべをさめしめられたりと。われらは信ず、明治天皇の大御心は『明治天皇御集』に表現せさせられたりと。われら日本国民は、かしくも『明治天皇御集』を拝誦しつつ、明治天皇の大御言をさながらにいただきまつるのである。

申すもかしこかれども、明治天皇はたふとき大御身にましまして、祖国日本のために大御身をささげつくさせ給ひて神あがりましましたのである。また祖国日本のためにその身をささげたりしものま心はみな、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたのである。われらは『明治天皇御集』を拝誦しつつかくのごとしとしぬびまつるの

である。

われらは祖国日本を礼拝し『明治天皇御集』を拝誦しまつりてすすまむとするのである。唯一生命のゆくべき一すぢのみちをゆき、全国民にとつての同じき祖国日本をまもりて進まむとするのである。世界のいたりどまるところにはたらかむとするわれらはらからの生命の血脈祖国日本を、われらはともにまもりて進まむとするのである。

世界文化史上のまた世界現勢に於ける日本は日本民族団体であり、東洋文明の伝統及び理想の現実的把持者としての自立国家であり、また対照補足せらるべき東西洋文明の集中地点である。われらの祖国日本は、その分派としてのアメリカをふくむヨーロッパ文化単位と対立するところの、アジア文化の現実的総撰把持者としての自立国家である。祖国日本は既に確立せられたる世界文化単位であり、全ヨーロッパ統一の過程にある諸国家とは異なりたる開展階次にあるものであつて、普遍的概念としての

国家ではなく、まことにはただ『日本』とのみよぶべきである。故にわれら日本国民にとつては『日本』は『世界』であり『人生』である。『日本』はわれらの内心にくるところの『宇宙』であり『永久生命』であり『信順意志』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰である。

故にわれらは信ず、全国民はいまひとしく『祖国日本』を礼拝し、『明治天皇御集』を拝誦しまつるべしと。これまことに、明治天皇の大ききめぐみのもとに生けるわれら国民のかなしきねがひなりと、われらはここにこの信を告白宣言せむとするのである。

(大正十二年)

## 沁刻

## 一

さびしい冬が来た。

土、石、木の枝、森、山脈、空の雲、すべてあきらかに目にうつる、さびしい冬が来た。

水上みなかみから水は流れ、行く手には山脈に夕日がてらす、さびしい冬が来た。

言はぬ思ひをほほゑむごとき、うちにいのちの沁みゆくさびしさ、見よ、道のべの水田みづたには、小草をぐさのびたり、みどりの若芽、冬とはいへど日のてる水田に、みどりの小草、さびし小春日。

## 二

うつし世はかなしきゆゑに、詩にきざむ、いのちの律動、ものみな枯れて、残るは地熱、祖国のいのち。

ことある時は、あらはれいづる、しきしまのやまとだましひ、今の世の乱るるゆゑに、息づきて、やうやく目さむるいのちの律動。

一ときもやすむひまなきいのちのかなしさ、防護のたたかひ、やすむひまなし。戦ひ、戦ひ、進み、進め。

## 三

枯草原にふみ入れば、ふみしだかるる、その音のひびくしづけさ。みだれにみだるる、この世のありさま、今こそ、ひそめるものらの、むらがりて、立つべき時よと、めぐる大地に、しづかに立てば、さびしからずや、空を行く、鳥の影さへ、まれなる夕。しづかにくるる天地の呼吸か、しづまる夜の歌をきかずや、悲ししらべを。月てりわたり、芝生の上に横たふ木かげ、小枝のうれにも、うたふその

こゑ。

#### 四

有明の月とともにあくる夜の戸をくれば、稲をこく機械のひびき、遠くには自動車  
の警笛ひびく。

人のつとめをつとむるときに、不安失すべし。

にぎやかに、ことほぎうたへ、貧しく苦しくつとむるわれらも、み国をまもる祖先  
のみ靈に、目には見えねど現しきいのちに、わが身をささげ、わが身をわすれよ。

#### 五

しかして、いま、宣言せよ、ほがらかに、世界に向つて、世界文化単位日本の使命  
を。

あらゆる苦難をあつめてせおい、

いかならむことにあひてもたわむことなく、

わが立つ大地、――

祖国日本を礼拝し、しきしまのみちを、うたひあげ、よみつたへ、そこに生るる、

現しきいのちの無窮の進動、――

そを

もろむけて

われら現し身に

いそがしめよと、

われらは

ともに

ひとしく

礼拝す、

祖国日本を、

祖国日本を。

(大正十五年)

昭  
和  
篇



恩  
愛

やうやく目さめて

道をいそぐ、――

前進計画

そは

観念の世界を

はなれず、

地上にゑがく

理知の順路、

見よ！

足もとに

底なき深坑。しんかう

人間の慈悲

始終なし、と

思へどかなし

恩愛のきづな、

身はさむく

脈搏急に

血行渴しぬ。

みち行く子らにも

おほゆる親愛。

神のまもりの

鉄鎖にすがり、

身をささへつつ

ひとり行けば

さびし心に

あめつち狭し。

眠りもやらず

いひもはまず

かたりては

なぐさむれども、

うつぶして

嘆くか

なれはをみななれば。

ますらをの

かなしき言葉

かなしき運命

まのあたり見る如き

ふみをひらき、

祈念をこめて

意力を

無窮の

いのちに

つなぐ。

ふかき悲

はてなき不安

心につつまて、

人に説く

隣人の愛、

『さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老が庵にすむらむ』

大御歌誦しまつり

手をとりにて

人々は行くべしと

我は説きぬ

壇上に立ちて。

ひとり居れば

苦しき血行、

居るに堪へず

立ちてゆく

心のくるしみ、

はてなきみ空の

下に立ちて

やうやくやすらぐ

微動生命。

死のくるしみ

身に迫り、

反撥す

佞奸強欲脅迫意志を

あらはす言葉

濁れる表情、

かくのごときは

大磐石にそそぐ糠雨

ひややかに

ききすぐし

戦闘の

意力

心にみちぬ。

想像の

世界を

さぐる

断ちがたき

恩愛のきづな、

反省の

整理に堪へず、

もつれにもつれ

あめつち暗く

空気おもたく

静止の重圧

おほひかかるに、

神のまもりは

しきしまの

やまと心の

あつまりて

神となる

無窮の生に、

さまよふ我を

みちびきて

その中に

没入せしむる、——

いやしく

まづしく

生くる

名もなき民の

信の世界よ、

不安のうちにも

たじろかしめず

すすみ行かしむ。

友よ！

とよべば

友は来りぬ。

めには見えねど

そのゆくあとを

われは追ひ、

われをよぶ

なれの言葉を

耳にきき、

また

わが思ひ

なが耳に

つたはりしと

思ふに

やすらぐ

大地の

しづけさ、

たたへし

水には

ささ波おこれど

うごかず

わが信。

かしこかれども

明治天皇の大御歌

をろがみよみまつり、

いのちのかぎり

ひたすすまむと

決意より

実行へ。

かなしき思ひを

うたひし詩をば

學術改革の序曲、――

詩集祖国礼拝、と

題する

一卷にまとめて

送りぬ

東京の

友らのもとに。

友よ！

とよべば

友は来りぬ。

ああわれは

世のほこりをすて

祖国のいのちに

帰依したてまつり、

ふかきいきを

ひらけたる

自然に呼吸し

親子はらから

郷土の

隣人

祖国の

同胞

ともに手を取り

没入せむ

祖国無窮のいのちのうちに。

(昭和二年)

## 郷土追放

「収入の途絶えたり、で……」と

此の一言は**はく**のあたまへしみついてをる。

手術後の疲労したそのからだにも負けじ魂がやどつてをつた彼は  
絶望的不摂生から

急死してしまつた。

これは日本農村に於いて

共産主義宣伝実行の

放任せられて**瀾漫**し深刻化した

小作争議の生んだ

悲劇の一つである。

友よ、これはぼくの郷土生活交際範圍に起つた事実のうちの一つである。

午前二時ごろには

きまつて眼がさめて眠られない、

床をならべて

すやくくと眠つてをる

わが子らよ、

汝らなれらの上にも

境遇の变革

生活の不安が

いま、その枕もとまで

迫つてをる、

それを直感したまま推理する

わが心を

友よ、くみとりたまへ。

断腸の思とは

かくのごときか。

ぼくの心はただちに

祖先の思想生活につながらしめらるる、

なげく、といふ日本語よ、

まことその言葉のごとく

わがつく息は長く、

われらの祖先の

かなしくををしき

移動悲痛生活を

いまわが身に

体験せむとするのであるか。

『うらなげき』『なげきこひのみ』

さげびいのりし

みおやのことばは

記紀万葉に

みちみちてをつたのを、

ふるさとをのぞむが如く

いまかへりみしめらるるのである。

いま日本の農村においては

共産主義の

嫉妬復讐感情と

掠奪凌虐意志とは

批判なき知識、精神なき教育、信仰なき訓練とともに  
それを、すなはち共産主義を、農村青年の常識たらしめようとしつつある。

事実探究と論理批判との一致して通説となつてをるが如くに、共産主義は無政府主義に連絡せしめらるる、風俗の無政府主義的頽廢は国民思想生活の無批判の表徴である。

いまぼくは此の農村赤化の中心地に

十数人の家族生活の『家の柱』となり

『かりそめの事に心をうごかすな』とふ

たふとき大御言葉ををろがみあふぎただきまつりつつも、

農村赤化の現状は

かりそめのことにあらずと

心をさだめ

生死の戦にそなふべく、

み国のために

この身をささげ

み国のいしずゑを

ゆるがさむとする

誤謬偏倚分裂破壊思想と

そを侵入せしむべきすき間あらしむる

不正政治と

戦はむと決心したのである。

自作農創設の姑息繙縫政策を利用して

全国民の負担による低利資金と補給金とをふところにして衰微しつつある郷土を荒廃するにまかせて農村を、賢さかしく立退かうとするために、醜い運動までもするものらをまなぶべくもなく、

ほくは全身心を名も無き民らの辛勞生活に没入せしめて、水路と耕地と、役場と県庁と、それらの間に奔走した、最近の六七年間、

一般社会主義から共産主義に進展して来た小作争議のひろがつて来たのは此の六七年間であつた。

地主、地主会長、地主小作協調会委員、県下郡下の地主有志会の会員役員、また地方新聞の寄稿家といふやうな役目の下に、

寺院本堂神社拝殿公共会館村役場新聞紙上等で、また個人の折衝において、

此の社会共産主義と思想戦を戦ひつつ、

いままさに没落せむとしつつある農村中流階級の残塁を死守して、有為の耕作勤勞者をして農村中堅文化支持者の位置に進ましめ、

無為遊惰優柔不断の地主階級の反省と奮起とを促しつつ、  
腐敗選挙と不正政治とにもとづく

全国民生活の弛緩と墮落とを救ふべく、

されど聖者義人をもつて自任すべくもなく、

罪惡深重煩惱熾盛ほんなうしやうの

現実人間性に随順しつつ

ただ祖国日本と日本精神とを

礼拝信仰して

これを

しきしまのみちに実現し、

マルクス・レニン主義としてのの

社会・共産・無政府主義を、

わが祖国日本の

またしきしまのみちの

敵として

戦はむと、

かしこかれども

『明治天皇御集』を

をろがみよみいだきまつり、

いくたびか

たふれむとしつつ

よびかくる

友らの声に

よみがへり

戦ひすすみ

来りにし過去よ、

筆とりて戦ひし前後通じての二十年

筆をとるとともに政治社会的活動において

戦ひたりし最近の十年よ。

友よ、

いまぼくは

策戦第三期に入ったのである。

祖先以来何百年か

人類原始生活の跡をもとどむる

人類の故郷

また

わが家族の郷土

甲斐国長塚を

いま

ぼくは去りうべく決心し用意しつつある、

郷土と祖国とのために

忠義の民となりて

たふるとも

わが信を

祖国と郷土とにつなぐべく。

郷土のために

五十年の一生をささげつくした老いたる父も

ぼくの此の決意をうなづいたのである。

もとより妻も子らも、また。

幼い子らは

おのづから彼らの耳に入る

この話をききしつて

学校をうつることの心配を

その小さい胸から

母にうつたへたといふ。

されど友よ、

ほとくの家族生活の間に起りつつある生活動揺の波はきはめて小さいものである、周囲の農村に起りつつある生活の悲劇は、それをつたへるには、その悲劇に表現をあたふるには、シエクスピアを地下よりよびおこさねばならぬのである。

少数民族凌虐中流階級没落の報道はドイツ新聞でよんでをつたが、それがいまほとくの身辺に起りつつある。

土地無償没収の宣伝策戦からただちにその多衆団結威力による強制的実行と、中央地方行政司法官憲の放任と、そこに起りつつある掠奪凌虐行為は、

被害者に永久の怨恨を刻印するであらう。その怨恨のいやはての目的はいづくに、

……

友よ、

問題はあまりに重大である。——

しかしながら友よ、

ほくは

友らとともに

日本はほろびずと信じ

神のまもりを信ずる。

友よ、

以上は

ぼくの心のうちの

たたかひの律動を

家族社会国家生活事実と結合して

表現したまでである。

友よ、

われらの信は

戦に臨んでも

ぼくにおちつきを

あたふるのである、

さいはひに心やすかれ。

いま筆をおいて

ふたたび筆をとり

次なる戦に向はむとする

ぼくのために

礼儀をもわすれたる

無音をもゆるしたまへ、

戦の通信は

ぼくのたましひに

詩作のほのほを

点火しつつある、

『しきしまのみち』は

ここに実現せらるるであらう。

われらの詩は

血をもつて書かるる、

思想戦備の予告は

すでに戦ひである、

殷々たる

## 軍楽の

ひびきよ、

耳かたむくれば

友らの声は

天地に満つるに、

ふる里を失ひ

郷土を追放せられても

帰りゆくべし

祖国の胸に、

帰りゆくべし

祖国の胸に、

祖国のいのちの

ほろびざるを  
信ずるわれらは。

(昭和四年四月)

## 神まつる昔の手ぶり

参り路ちの

並木、

みやしろの

木立こたち、

限りなき

御空みをかよふいのちの狭霧さに繁枝しげえさしのべ雲井くもにぞ向ひて集る

木群こむらのなかに

鎮ちんまりまします

御祖みおやの御靈みたま、

御祖の御靈の

鎮ちんまりまします

みやしろの広前に

ひれふし、ぬかづき

手を拍うち

手を合せ

手末たなすゑのひびきを

言の葉のしらべに

かよはしめて

をろがみまつり

いのりまつる、――

まめやかに

我<sup>わが</sup>大君<sup>おほきみ</sup>に

つかへまつらむと

ちかふことばは

現身<sup>うつそみ</sup>をつつむ御空を

天<sup>あまつた</sup>伝<sup>つた</sup>ひかけりてゆけば

わかれて成り出でにしもの

ふたたびつらなり、

ありし世の

罪とふ罪はことごとく

祓<sup>はら</sup>ひ清<sup>う</sup>め失<sup>う</sup>はしめらる。

分<sup>わ</sup>れてははてなけれども

分<sup>わ</sup>れたる間<sup>あはひ</sup>のみ空<sup>ひ</sup>に

つらなりてものは生<sup>う</sup>るる、

宇宙<sup>うちゅう</sup>はつらなりて一つなれば

虚<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>より生<sup>せい</sup>命<sup>めい</sup>をもちきたす。

地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>をつつむ霧<sup>か</sup>囲<sup>ん</sup>気<sup>き</sup>より

光<sup>ひかり</sup>と熱<sup>あつ</sup>とはそそがしめられ、

人<sup>ひと</sup>体<sup>てい</sup>の霧<sup>か</sup>囲<sup>ん</sup>気<sup>き</sup>より

いそそぐいのちの矢<sup>や</sup>叫<sup>さけび</sup>、

視<sup>し</sup>聴<sup>ちやう</sup>の定<sup>さだ</sup>むる

時空を超えて

感觸の世界に

神人交通の儀礼を展開す、

祭りごとに

人はあつまり

をろがみいのりて一つにつながる

御祖より御裔みすゑにつたはる生命せいめいの連絡れんらく、

生命の衝動

人生の規律

天地の法則、——

神かむながらの道により

生命の原理は生命、

生命をささふる生命

その名は『日本』。

随順の感情

帰依きえの対象

その名は『日本』

永遠の宇宙に

一つありて二つなし、

日本の意志は

天皇の大御言に宣のらせたまひて

み民の心につたはり

み祖おやの靈みたまにつらなりて

あらゆる方向に分れてはつながらり、

はてなく広がりて  
宇宙につたはる。

大御言は

宗派しゅうはいの教義きょうぎにあらず

信教自由しんきょうじゆうの選択対象せんたくたいしょうにあらず、

神まつる昔むかしのてふりは

神かみの御裔みすゑの日本にっぽんの伝統でんとうにして

『神まつる昔むかしのてふり忘るなよゆめ』と

現人神あらひとがみ

明治天皇めいじてんかうの

道速振神ちはやぶらのひらきししきしまの道みちにより

これのみぞ、忘るなよゆめ、と

おほみさとし  
聖諭あらせたまひにし

大御心をあふぎまつるべし、

大御歌くりかへし、くりかへし、くりかへし、をろがみよみまつりて  
大御心をあふぎまつるべし。

(昭和五年八月)

## 田代順一兄追悼ののりと

銅アカガネのやうなからだをして、全国徒歩旅行から帰つて来た君の、たくましい、肩幅の広いからだを、西片町のすまひで、向き合つて見た、その印象はいまもあきらかに再現せらるる、否、いまもなほわが眼にのこつてをる。

手帖の切れ端に、鉛筆で走り書した君の通信は——その文字にも力がこもつてさ走つてをつた——日毎日毎に数知れぬ連作の歌を「人生と表現」によせて来た。三十二頁の『人生と表現』にのせるために頁数ペエジの計算を容易ならしめるために、ほくはその走り書の歌稿を三十五字詰の大型原稿紙に三十三字詰に清書しつつ、家にとちこもつて居るぼくは、想像の世界に君の旅程を追うたのである。それは現身ウツシヰミはともなはないけれどもまことの道づれであつた。それがことのはのみちであり、またしきしまのみ

ちであつた。大正三年一月一日の『人生と表現』にのせはじめたる、大正二年十一月十二日夜千葉にてしるしたる、君のてがみの始めのことばは、——『ただ今発足致します。かしこけれど日本武尊御東征の御心を体して、寸時もゆるみなく努力するつもりでございます。』とある、その時より十八年目の、昭和五年八月十三日いますむ甲府市の盃蘭盆のまつりの初めの日君の追悼ののりとの筆をとるのである。

君はいますでに、君の友の一人のうたひしごとく『はてなきみ空にかけのほり』て『雲の上ゆきかふ』に『われら地にあり』つつも、われらのことば君のみ霊にかよふべく、またかよはしむるがわれらのつとめである。永久の生命とは永久のつながりである。

かなしき此世のつとめに、行く雲のまた流るる水の自然のすがたを友として、都でのかりのすまひに身をよせつつ、君の心ははてなきみ空に自由にのびて、ほがらかのひびきを、口ごもりつつうたひびかしめて、君の友らを君の周囲にひきつけたりし、

そのひびきは今も歌にはのこれども、現身にはきくべからず。ことのほの道、しきしまの道は、永久の生命をつたふるが故に、この世にはかなしきひびきをつたふるものと、いまさらに、君ゆきまししえにしによりて、さとらしめらるるのである。

七月二十五日真夜中すぐるころ、原理日本社より急電により、その夜のうちに疲れしからだを東京にはこび、君の麻布のすまひに、炎熱の真昼に、君の枕辺にたなすゑのみちの江口先生、君のみうち、また君の友らとともに、それが最後の挨拶をかはしたりしそのときに、君の友らの君の枕辺につどへるを知り、またばくの名をききて、すでに半ばは此の世の意識を失ひたりし君の面わの、口もとに、はれやかか、またつつましげのそのほほゑみは、君のいのちのしらべをば此の世の名残にとどめしかと、ああその不可説フカセツの、されど現ウツしき、その生命の律動を、世にながく、知るまた知らぬ同胞ハラカラにつたへなむこそ、われらが地上のしごと、われらのつとめと、わがつとめはたすべくその日のうちにふたたび甲州にかへり、二十七日再び上京して、杉並の新しき

すまひに病軀をはこびし君をおとづれ、此の世の最後の対面をなせしときには、君のみ霊はすでに天がけりつつ、苦しげの君の呼吸は、われらが君の胸に手をおくとき、——手あてはわれらの儀礼である、——君の呼吸はやうやく間遠になりゆき苦みもうすらぎつつ安らけき臨終を予告するを、われらはふたたび君のすまひを立ち出でて、たなすゑのみちびきのおつまりに向ひしに、そのみちびきのおつまりの始りし時と時を同じうして、午後四時四十五分、ぼくの開会の挨拶の正にをはりたりしその瞬間、次の瞬間に明治天皇御製拜誦の儀礼の始まるその瞬間に、君は此世を、現身にしてはまたかへることなく去りたまひしことをここに、君のみ霊をとぶらふいとなみのためコトに言あげるのである。

永久の世界を思へば、あした夕べによるこびはたえざれとも、無常の此世に、人類文化を東西につながらしむるがために、古今を貫く日本の使命を分担するものの悲壯のたたかひ、戦友の屍シカバネをふみこえて進みゆく、われらの生の、み民のつとめの何ぞか

なしき、御祖オヤのみ靈はまもらせたまへど、此の世のあひだは何ぞ悲しき、君が最後の意識のみだれゆきしとき、消えゆく意識の名残の讒語クソゴトにも、学校のつとめのことを語り、また生徒に人の世の行くべき道を教へたとす、そのほがらかの、ほほゑみつつふくみがちなる、されど確信にすべらるることばのひびき、すなほにてををしき大和言葉をさながらに示しつつ此世を去りし君の生涯は、波瀾にみちまた苦闘の連続なりしかども、しかもさやりなく、思ひのこすことなく、此世を去りて、君のみ靈はみ国まもらす御祖のみ靈につらならむ。

ああいまはわれらもろともに祖国日本の御名をよびて、もろともに君をしぬびまつらむ。人のことばは現身の人のいのちを、道速チハヤブル振神につなげど、人のことばはまことに悲し、われらいま人のことばをしばらく遠ざけ、ただ御国の御名を呼ばむ、もろともに御国の御名を呼び合ふときは、われらの声に合わせてひびく声あり、——ああ田代順一兄、君の声はいまわれらの声にそのひびきを合せつつひびき来るに、友よ、友ら

よ、もろともにわれらうたはむ。

『生命をささふる生命』

その名は日本、

ああ祖国日本よ、

永遠の宇宙に

一つありて二つなし』

ひびきはひびきをさそひてひびき来る田代順一兄の声のひびき、また歌のしらべの、日本のみ民の道のもとづくところ、み民のいのちの、み民の歌の、いつるいつみは、

かけまくもかしこかれども

日の本のしきしまのみちまもオホミシラベもラベらせたまふ

明治天皇の大御歌の大御調と、

かしこみかしこみて

明治天皇の大御歌

もろともにをろがみよみまつらむ、

田代順一兄のみ霊の前に、

われらの友田代順一兄のみ霊の前に、

まめやかに我大君につかへまつらむと、ひたすらにしきしまの道ふみわけたりし、わ

れらの友、田代順一兄のみ霊の前に、

をろがみよみまつらむ

明治天皇の大御歌、

もろともにをろがみよみまつらむ

明治天皇の大御歌。

## 人生の悲劇・宇宙の歡喜

——または『生死の空間』——

宿業シユクゴフのさだむる遺伝素質と吉凶運命との下に、

内心には巨浪オホなみつねに逆巻けども、表面には静かなる生活、——

現実の複雑を統一する『思想』

科学文明の無限の分析となりて

平和の御代に文運の興隆、

ここに永久の静止を夢想して

纏綿たる情緒は

分析の進路に目標を失ひ

治世は乱世の前駆なるを、

ああ！ 仇なしとゆるびにし心よ、

消ゆる夢路のあともなき

わが来し方のかへりみせらるる。

涯ハテなき宇宙にも

定まれる法則あり、

暮れゆく今宵の闇

明くるあしたの光、

交代あやまつことなく

安定の地上に平和の認識、

しかしながら波動の週期に相触れて反撥する生命、

放射し爆発し集散また出没しつつ

新体系の回転するとき

認識の構成、仮定の足場は

原始の生命、盲目の衝動のままに、

薄明の狭霧の中に、

前後もなく

多少をはからず、

また三世をわかたず

ただ混沌として幼年の記憶の如し、

されど星無きみ空にも

見よ！微かの光とほじろく

さびしきいのちのしるし、

微かなるその一点

われらのいのち託す

その一点、——

われらの祖国日本。

めぐり来る人の運命、

あるひは社会交通のでだての財宝を絶つて貧窮の生活に生命の連絡をさへぎる時、

たふれたる地上より、なほも地中に、

地殻より身をひくあやしき力。

悲み身をつつみ、光をさけ御空をいとひて

まやみのうちにおちいりつついよよ内にかくるるぞ

まこと生命の衝動、

しばらくの睡眠の休止にも

とこしなへの寂静死滅ジャクシヤウのかげともなふ

くるしみのきはまらむとする

真闇のうちにも一すぢの光、

祖国の生命御空にあふれ、いそそぎ、とよもし、ながるる狭霧のひまもなくみちみ

つるに、

触れよ！

御空のひびきに、

御国のいのちに。

見よ！ ふたたびみ空は暗く

行くべき道には

障壁かさなり

押しよせ来る

空打つ大波、

居住の大地

活動の範圍

いよいよ狭ばまり

生命は阻まれぬ。

まこといふべき言の葉もなく

ことのはのみちのしきしまのみちいよよせばまり

真闇の夜空に

微かの一点、——

世界現勢に於ける祖国日本。

われらの祖国日本のいのちは

われらの心にさながら映るしきしまのやまとだましひ、

生死のあひだにめさむる心、

御空にあふぐさびしきいのち

わづかにみとむるその一点、

いのちのみちは

せばまる故にまたひろごりて

絶えなむと見ゆる光も

見よ！

近づけば

まばゆき光

アマテラスオホミカミ。

われらの地球もわれら人類もいまだ幼くして一人行くべからず

幼子のその見る世界、その聞く世界、

それを統ぶる力なければ

ただその父を

ただその母を

あふぎてたよる、

われらはわれらの御祖をあふぎまつりて生くるのみなり。

はかりがたき神のころは

まめやかに我大君につかへまつらむと誓ふところに

真寸鏡マソカガミうつりなむ。

こころの鏡にうつるがままに

思ふがままにいひいづる

しきしまのみちのことのはのしらべ、

ことのはのしらべにしらべあはする

たなすゑのみちのたなそこのしらべ

かぎりなき天地のいのちにつながる、

われらのいのちのよりどころ

祖国日本のいのちにつながる。

個我は全体に

国民は国家に

我は国の姿

国は我の鏡、

御祖のいのちは現しくわれらのいのちここににつながる、

己が身はかへりみずして人のためつくすつとめをせおふとき

われらの個我は御国につながり、われらの生命は充実緊張して  
われらの見るもの、きくもの、ふるるひびきは、  
御国のいのちのうつつしきしらべにみちびかれて、

宇宙のあひだに

微かに点在する

われらのいのちも

宇宙につながる。

地上の生活

人のいのちのしらべは

宇宙のいのちのしらべにつながる故に、

人生の悲劇は

宇宙の歎息、

生死の空間に生るる永久の生命。――

『郷土を追放せられても

かへり行くべし祖国の胸に』

ああわれらのことばも、われらの運命も、つひにわれらみづからはかるべからず。

しかしながら、道速振神の心にかよふこそ人の心のまこととふ

大御言あふぎまつり

天づたひ人のところのかよふとふ

道速振神の心に

したがひまつらむわれらもろともに。

天にます御祖の御霊ををろがみまつれば、

見よ！

日はかがやく

御空に、

御空に

日はかがやく。

天照す神のみひかりつたへます

現人神に

我大君に

つかへまつる神まつる昔のてぶりをさむるは地上にただ一つ

そはわれらの祖国日本。

宇宙にみつるすべての光はここにあつまる

われらの祖国日本に、

日出づる国に、

見よ！

日はかがやく

み空に、

み空に

日はかがやく。

(昭和六年五月)

## 河村幹雄兄の靈にささぐるのりと

いまわれらの同胞は、満洲において、また上海において、祖国のために身をすてて戦ひつつある。

この時にしも、君もまた、戦ひてたふれしか、『日米不戦論』をその戦ひの一つの記念にのこして、戦はずしてアメリカを屈服せしむべき方略をといひ、君はわれらを残して、すでに此の世を去りたまひしか、対米時局いよく緊張しつつある時ににおいて。

人の此の世に生れてくるといふことは、つきせぬ罪のわざであると思つてをうた、またいまもさう思つてをる。しかしながら勇氣の無いぼくは、ただ躊躇し、逡巡してをるのみである。しかしぼくも知命の年に達して、やうやく人生どはいのち

をすてる、といふことにきはまる、とさとりかけたのであつた。しかしながら、このことを、君にかたつて、をしへをこふべき境遇におかれなかつた。

しかしながら、昭和六年の春、ぼくは始めて九州の地をふんで君に福岡であふことができた。君はぼくらの行くのをまつてをつてくれた、待つてをつてくれるといふことはありがたいことである。

ぼくらは、滝口兄とぼくとは、君が疲れてはと思つて、その夜君の家を辞さうとしたが、つひに、君のとめらるるままに斯道塾の講堂に泊めていただいた。きれいの、すが／＼しい、また広々した室であつた。

君の家へついた日の夕方であつた。君はぼくらを名物の水煮料理へ案内しよう、門外に待つてをる自動車へ向つて一緒に玄関を出る時、君は一步さきに出て、僕が外套をきるあひだ君は僕の帽子をもつてまちつつ庭に立つて居た、その君のまなざし、その君のほほゑみ、それはぼくの眼にまたころに、深くも刻まれたのである。

ああ、河村兄よ、ぼくは、またぼくらは、君を忘れぬであらう。ぼくらは、君の友ら、君の教へ子とともに君を忘れぬであらう。

思へば十数年の昔である。わがふるさとの、わが家に突然たづねて来て庭の池のほとりに、立つてをられた君のすがたを、ぼくは思ひ出す。これは君がアメリカから帰つて間も無いことであつた。君は、ぼくに君のそばに行くことをすすめられた。しかしぼくは東京から遠くはなることが躊躇せられたのであつた。ぼくは、実に明治三十八年の戦役に従軍して身をすてて御国のためにつくすべきであつたのだ。この時に生きながらへしめられたわが身はなきものと思つて御国のためにつくさうとする志、この志は今思へば御国をまもるために身をすてたますらをの靈にみちびかされたのであつた。さうして、この志が君をぼくのふるさと、山の中のせまくるしい村のすまひへみちびいたのであつたか。この志はうしなはなかつたけれども、ぼく

はちからよわくところおぢつつ、ただ志をおなじうする友らの期待にそむくのみであつた。

またこのごろ、しきしまのみちにつながる同志田代、黒上、福村の諸兄はつきつきにこの世を去りましたも、そのみ靈はうつしくいま御国をまもりたまふことをぼくらはかたく信じてをつたのである。

しかるにいままた君もこの世をさりまししか、思へばわれらのつとめはいよいよ重く、われらの無力また微力はあまりにも切々としてわれらの胸にせまつてくる。

今日ぼくは、わがふるさと、そこから僕とその家族との追はれた家のそばまで行つて、その門前に近づいたけれども、その住む人も無き、現しき夢のごときぼくの家の、ぼくが歌をよみ詩をつくりまた『明治天皇御集研究』その他の論文をかいたあるじなきされどいまもなつかしき書齋には友らよりの古いてがみが残してある、その中に君のてがみもあるのであるが、それをしぬびつつも、その家に立ちより、友

らのがみを選択してもちかへることもせず、行く人もまれなるなかみちをただ一人、ぼくはいまの借家住居へと歩みをはこんで来たのである。いまぼくは放浪の旅人を思ひ、しきしまのみちをふみゆきにしますらをのかなしき晩年を思ひ、かへりみて生くれどもただ地上になげられた陰影のごとき、敗走残存者としての自己をみいだしたのであつた。このくづほれなむとするぼくをむちうちにはげますは、ああ河村幹雄君、きみの霊である。ぼくはきみの霊をまつらうとして、きみの霊にみちびかれゆく、きみ死にましてぼく生けるか、ぼく死にてきみ生きますか、ぼくのころはただ茫然として、時をわかち所をへだつるめあてを失つてをるのである。

ああきみは戦ひてきずつき、いたでをつつみて進みつつあつた。しかしながら、そのけだかき、またすがすがしい、そのまなざし、そのほほゑみ、そのことばは、それはますらをのみちのやまとだましひのかがやきまたひかりであつた。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

このうたをかきとどめよ、ときみの家においての最初のまた最後の面会できみがいつたのに、それもはたさずにぼくはあわただしくもかへりぢに向つたのであつた。

野戦陣頭に立つて叫叱する、また海上艦橋に立つて号令する、または帷幄の中に戦略をめぐらす、君のすがたを、武士のすがたをわれはしぬぶのである、ありし日のきみのすがたに。

昭和七年二月十一日、北支那満蒙の曠野にまた南支那上海長江のほとりに、水陸空のわがみいくさは、敵前に於いてひむがし祖国の方に向ひて遙拝の儀式ををさめたと報道せられてをる。全国民はいまこぞつて支那事変また国際会議を中心として祖国礼拝の国民宗教儀礼を人生事実に於いてをさめつつある。

われらは、いまわれら同志とともに、また実におのづから祖国防護戦線につらなるは

らからとともにつつしみかしくみて君の靈をまつらしめらるるのである。

かつて南京事件の起りし時、身をすてて戦ふべき武士のころのすたれたりしを、いたくも君は嘆いたのであつた。君は『日米不戦論』において、——『男子の職務は千差万別、数ふれば限なけれど、畢竟人生の戦鬪に於ける塹壕の埋め草となるべき運命、それが男子の運命である。われらの屍を以て埋めたる塹壕の上を行くべし、女子は子供の手を引いて、人文の宝を背負ひつつ、未来の光明世界へと渡りて進みゆくべきである』と説いてをる。

ロンドン会議に際して君は『日米不戦論』——戦はずして敵を屈伏せしむべき方略を説いたのであつた。

不吉なる『民政』の名の下に行はれたる未曾有の国辱的敗北外交、それを追うて頻々として続き来りし排日侮日また圧迫干渉をうけて起つべくば今こそ起てとふるひ起ちし神意随順目的分化の、戦へばあらはるるやまとだましひの創造威力、事あると

きの神のまもりに、われらは現しく君の靈の焔蒿を感觸する。

君の靈よ、反省の逡巡、思惟の昏迷、はてもなき泥濘の海に断ちがたき執着のわれら  
残存者をむちうちあげましみちびきたまへ。

福村忠男兄はロンドン条約で戦はずして潜水艦を撃沈せしめられたことを痛憤して、  
病褥を蹴つて奮起し同志によびかけつつ、つひに此の世を去り、それにつづいて君  
もまた此の世を去りし、うごかしがたき此の因縁によつて、われらは信ずる、われ  
らが、われらの友の靈をまつる儀礼は、——戦であるといふことを。

弓矢もて神のをさめしわが国の神のひらきしきしまのみちの厳肅なる儀礼は人生の  
綜合戦闘である。われらは眼前に展開する個人生死国家興亡の綜合大戦へのわれら  
の出陣の門出に勢揃ひして君の靈をまつり、君の靈を礼拝する。

ああ君がその玄関に立ちて、われらにさきだちて、われらをみちびきしその夕べのけ  
しき、また君のすがたをいま思ひうかべて、われらはあるし日の君に挨拶するがご

とくに親しく君の靈を礼拝する、友らとともに、もろともに、こころをあはせて、  
ひとすぢに、君の靈ををろがみまつるとともにまた御国まもらすみおやのみたまを  
をろがみまつる。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを  
しきしまのやまとしまねのをしへぐさきみつちかひてよををへにけり  
ななたびもうまるるまなくきみのいのちそのをしへごにいまつたはらむ  
ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを 再唱

(昭和七年三月)

## かみこと・み空のこゑ

時によりすぐれば

民の嘆きなり

八大竜王雨やめ給へ、と

祈りけむ人のことばを

思ひ出でくりかへしつつありき。

降りしきる雨、

せまりくる溢流の音、

刻々に水路の水量増加し

地上のものは

低きものより

影を水中に没し、

田も畑も屋敷も

急流の通路となり、

傾斜の地面に

水平をもとめて

奔流渦まく。

刻々に夜はふけゆきて

不安は

交通を絶たれたる

家々を襲ひつつあり、

その時にしも

耳かたむけよ

蟲の声きこゆるを。

蟲の音は<sup>ネ</sup>

生きとし生けるものの思ひを

しぬばせ給ひにし大御心を

思ひいでしむるよすがぞと、

み民のころかなしかれども

やすらはしめらる。

射る矢の如き

急流に浮き沈みつつながれくだる

巨大なる材木は

水勢に乗じて

堤防に激突し、

破るる堤防より

濁流は奔馬の如く

稲田を覆ひて

落下のいきほひすさまじく

暗夜の村落に侵襲し来る。

田も畑も道路も屋敷も

激流とその溢流との間に

押し流されむとするとき、

——一時間の後には人命も家財も失はれなむとするとき、——

雨はやみ

風はなき

溢流は徐々に減水しつつも

晴れたる夜空に、

そよ吹く風のまにまに

激湍急流の石をうつてながるる音は

耳に近くひびき来る。

そのあくる朝も

昼も

夜も

そのあくる日も

またあくる日も

日ねもす夜もすがら

ひびきくる河の音オトを

ききつつぞ思ふ、

西北に国あり、――

無慈悲の物欲

無顧慮の激情

掠奪奪還、無限復讐虐殺の反覆

此の世ながらの地獄の責苦セメツクを人に与へてよろこぶ残忍意志を

術学の理論に包んだ

マルクス・レニン主義の

地獄の番卒を

現代科学兵器を以て装はしめ、

空中よりまた国境を超えて襲撃せむとする意図を

警戒し、

戦備せよ、と、――

み空をつたひて

ひびきくる

河の音すにも

目に見えぬ神のころをあふぎまつる。

さまざまの蟲の聲、

四面シメシにひびく

しづかなる夜あけ前

筆をとりて

思ひをのべぬ。

見よ！ 巨大の材木

急流に乗じて

槌打ツキダキランヨ急杵キランヨの破壊の重力、

同胞をその惨害に泣かしむる

『民政』意志より氾濫してとどまらず、

困難は不安のうちに集り来る。

ああ政党と官僚との『民政』意志の下には

臣道は全うしがたし、

此の『民政』意志と、その上に五月蠅サバヘなす湧く

マルクス・レニン主義宣伝とその放任とによつて

上下より、中流階級の生成と存在を覆し、

侵略を容易ならしめむとして内乱を誘発せむとする

外敵に内応するもの、

彼等はひとしく臣民にてありながら『臣民』を政治せむとする、  
国体に反逆せむとする『民政』主義者である。

われらはこの僭濫意志の下に虐げられ

臣道の忠義を説くことをすらも弾圧禁止せられて

僭濫意志の対象としての『物』と化するならば

われらは

天皇のみ民たるの資格を失ひ

不忠の罪はのがる可らず

われらはつひに『民政』意志の下に

み民の道をふみゆくべからず。

天照す神のみひかり

さへぎりまつらむとする

僭濫増上意志の下には

臣道の忠節は全うすべからず。

さびしき里に

日ねもす夜もすがら

さまさまの蟲の声をききつつ、

いつくしみあまねく

いたらぬくまなき

大御心を

しぬびまつる。

大御心を

あふぎまつれば

み空にみつる

すべてのひびきは

天照す神のみいつと

かしこみまつる。

天照す神のみひかり

つたへます

すめらぎ

わが大君を

あふぎまつり、

すめらぎ

わが大君に

まつろひまつれば、

はてもなきみ空にみつる

すべてのひかりとひびきとさゆらぎと、

分れては集り離れては繋がる

いのちのながれを

一つのすぐちに

すべをさめしろしめし給ふぞ

万世一系の

天皇

わが大君にましますなる。

わが大君にまつろひまつららず

『臣民』にして『臣民』を政治せむとする、

大権を干犯しまつらむとするもの

地に満てり、

かれらをゆるすべからずとふ

神語は

み空に満てり

神語は

み空に満てり。

(昭和十年十一月)

われ万物によりて生く

無心の土、石

宇宙ををさめらるれば

宇宙の意志に繋つなりて

無心にして無窮の生に入る。

ある日われに

観念浮びたりき、——

われ万物によりて生く、と。

一切の障礙も

当面の仇敵も

すべてわが生セイに繋つなりて

われわが生セイを生イくと知るべし。

この時にかしこかれども

明治天皇御製を拝誦しまつりぬ。

起き出でて思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ

ねざめせしこの暁のころもてしづかにものを思ひ定めむ

思ふこと思ふがままに言ひいづるをさなごころやまことなるらむ

をさなごころのたふときかな

没我の心境

自然の感覺

神ながらのみちは

個我の思惟にあらず、

この世にあるもの

すべてわが生につながりて

それによりてぞわれは生くる、と

みとむるときに

われは没入す

大信海、

その名は『日本』

日本をしろしめす

天皇のみことのりに

従ひまつりて

われらは生きまた死なむ

生死の間の

思議計量を断滅して

天壤無窮のみことのり

われらの生のゆくへをしめさせ給ふと

かしこみまつりて

しきしまのみちの

ことだまのさきはひ

ことだまのたすけは

かぎりあるいのちを

かぎりなきいのちに

みちびかせ給ふぞ

ありがたきかな。

ここに万物われらのいのちにつらなり

われらみ民は

我大君の大みことのりにより

宇宙の生命にをさめしめらる。

(昭和十五年二月)

神州不滅

明治十年十一月

御苑に菊花をめでさせ給ひ

侍講元田永孚に陪觀せしめ給ふ。

御宴酣なる時

出師の表を吟ぜよと

勅諭あり

老臣感泣胸を沾す。  
ウルホ

聖上御感あり、

夜半御馬ミマに召させて

還幸あらせらる。

「臣亮言。先帝創業未半。而中道崩殂。今天下三分。益州疲弊。誠危急存亡之秋也。……臣本布衣。躬耕於南陽。苟全生命於乱世。不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙。猥自枉屈。三顧臣於草廬之中。諮臣以當世之事。由是感激。遂許於先帝以驅馳。後值傾覆。受任於敗軍之際。奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹慎。故臨崩寄臣以大事也。受命以來夙夜憂慮。恐付託不効以傷先帝之明。故五月渡廬深入不毛。今南方已定。甲兵已足。當帥將三軍。北定中原。庶竭駑鈍。攘除姦兇。興復漢室。還於旧都。此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。……臣不勝受恩感激。今當遠離。臨表涕泣。不知所云。」

友よ、易姓革命の国にも

君臣の義理より

抒情詩が生るる。

神洲日本の君臣の大義は

「天人キミタミの際アヒダ」であつて

個人主従の関係でもなく

社会共和の約束でもない。

神洲日本の君臣の大義は

天壤無窮神洲不滅の堅信にもとづく。

神洲不滅は

希求ケクの観念

憧憬の理念にあらず

実人生の直接経験であり

日本臣民の心理学であり

臣道諸科学の基礎科学であり

具体的にはシキシマノミチである。

シキシマノミチとは

ヤマトコトバノタカキシラベである。

『<sup>スメカミ</sup>皇神の見はるかします四方の国は、天の壁立<sup>カキ</sup>つ極み、国の退立<sup>ソキタ</sup>つ限り、青雲のたなびく極み、白雲の墜<sup>オ</sup>り坐向<sup>ナムカブ</sup>伏す限り、青海原は棹楫干さず、舟の艦の至り留る極み、大海原に舟満ちつづけ、陸<sup>ツカ</sup>より往く道は、荷の緒ゆひ堅めて、盤根木根ふみさくみて、馬の爪の至り留る限り、長路<sup>ナガヂヒマ</sup>間なく立ちつづけて、狭き国は広く、峻<sup>サカ</sup>しき国は平らけく、遠き国は八十綱かけて引寄する事の如く、皇大神のよざしまつらば……』

『……<sup>スメミマ</sup>皇御孫の命の朝廷<sup>ミカド</sup>を始めて、天の下四方の国には、罪といふ罪はあらし

と、科戸シナドの神の天之八重雲を吹き放つ事の如く、大津辺にをる大船を、舳解き放ち、舳解き放ちて、大海原に押し放つ事の如く、彼方フチカクの繁木モトが本を、焼鎌の利鎌トもちて打掃ふ事の如く、遣ノコる罪はあらじと、祓ハヒひ給ひ清め給ふ事を、高山の末短山ヒキの末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にます瀬織津比咩ヒメといふ神大海原に持ち出でなむ。かく持ち出で往イなば、荒潮の潮の八百道の八潮路の八百合ヤホフヒにます、速開都比咩ハヤアキツヒメといふ神、かが吞みてむ。かくかが吞みてば、気吹戸主イブキドといふ神、根国底之国に気吹放ちてむ。かく気吹放ちてば、根国底之国にます、速佐須良比比咩ハヤサスラヒヒメといふ神、もちさすらひ失ひてむ……」

友よ、

この高天原につづく

大海原のはてもなくつらなるひびきのごときしらべに耳かたむけよ。

天壤無窮の神勅は

もとむるまぼろしにもあらず

ゑがきたるかたちにもあらず

皇神の現実経綸せさせ給ふところを

うたひあげたまふことのごとく

みことのりたまふのである。

やまとことばの高きしらべに

「古朝廷の雄略偉度」をしのびまつり

語言は事となり力となり行動となり

義勇奉公天壤無窮の

皇運扶翼の意志・行動となり

感涙に咽ぶ謙抑臣道規律となり

恭儉謹慎の内心に湧き出づる感激となるのである。

九重の雲居はるかに

いづる日のかたを仰ぎて

打ちむせび涙ながらに世をいのりし

純忠三条実美に賜ひし誄に

「重望ヲ負フテ廉ニ居ル」と宣はせ給ふ。

驕傲の醜賊を破碎するものは

日本臣道の廉抑規律である。

承詔必謹

義勇奉公の勅語に信順服従しまつり

神洲不滅を信じ

臨戦無畏怖

戦ひ、戦ひ進む

それがシキシマノミチである。

「斯ノ道」と宣はせ給ひ

「天地の公道人倫の常経」と宣はせ給ひたる一すちの道をひたすらにますぐにぞす  
すみゆくべし

やまとことばの高きしらべに歩調を合せて。

やまとことばの高きしらべは、あらゆる経典に脈絡して

道速振神チハヤルのひらきしシキシマノミチは

神のみ代より万代にたえせぬ道である。

それ故それは神洲不滅の現実真証である。

(昭和十九年六月末、サイパン陥落直後、駐蒙軍参謀として  
出陣の岡村誠之氏への餞)

戰  
後  
篇



蓑田胸喜君の靈にささぐるのりと

序、戦死の覚悟

靈につぐ

ひたすらにかなしむものはさいはひなるかな  
そのひとのいのちはほろびざるがゆゑに

昭和二十一年四月二八日完成

蓑田胸喜兄の靈にささぐるのりと

序、戦死の覚悟

一

光は星と星との間をつたはり  
アヒダ

言葉は人と人との間をむすびて

ここに天地テンチは一つにつながり

天之御中主神

高天原タカマノハラに成りまして、

感覚せられつつも

認識をこゆるもの、――

生命セイメイは

窮りなき

虚空に

ヤマトゴコロを展開する。

空間は生命セイメイの通路ツウロにして

天津御空は

日本の生命のふるさとである。

高タカ天マノ原ハラの神カミ代ヨは

眼マサカ前に成りつつある。

友よ、友らよ、

思ミひを御ミ空ソラにはせて

御ミ祖オヤの宮ミヤ処コ

生命のふるさとを

回顧せずや。

二

虚コクウ空ウは大地ダイチをつつみ

海原をおほひ

思想の世界を

人生の現実につなぐ。

皇軍ミイクサは今

「万里の波濤を拓開し」

戦死者の靈レイとともに

戦ひ戦ひ進みつつ

天空ミソラにつづく

国処クニガ（陸）をもとめて

人のゆくべき道をぞひらく。

懐かしき故郷フルサトにかよふがごとき

シキシマノミチは

空ウツと陸リクと

神代ジンダイと現代と

脈絡してひらかるる。

このミチにつらなりて

宇宙の万物

日本ヤマトのみ民の

ところにつながる。

宇宙の万物

日本のみ民の

ところにつながる

この時しもみ民のころは

宇宙とともにヒコはてなくヒコ拡ヒコがり

個我の意識はその限界を失ひ、

祖国は無窮の生命を展開する。

かくのごとく個体意志の宇宙意志に没入するを  
地上にてはこれを「戦死」とぞよぶなる。

み国のまもり

往ユきて還ユらぬ

永遠の進路に向ひ

戦死を覚悟するものは

この世ながらにして

すでに神である。

三

宇宙は一切を含み

地球は円マロがれる一つなるが故に

地上にはぐくまるるものは

排他独占を志すべからず、

宇宙意志に随順し

天地をその中枢につないで

最後の意志を捨身求道に集注し

ここに死の寂靜を体験するものは幸なるかな。

始まりて終る生死人生の「地之則」は

終りて復始る無窮宇宙の「天之道」——

天照大御神の

神のみひかり

神のみいつに

神ながらにをさめらるるのである。

戦死は解脱であり

祖国無窮生命への帰還である。

戦死を覚悟するところは

神のところに通ふ

人の心のまことである。

「誠心<sup>マゴコロ</sup>」とは

戦死を覚悟することである。

生より死に至る一切の観念が

その体験内容を充実し

言<sup>コト</sup>と事<sup>コト</sup>と一致する

言<sup>コト</sup>霊<sup>ダマ</sup>の幸<sup>サキハ</sup>ひは

戦死の覚悟にきはまるのである。

「闔国の人は闔国の為に死するの志確乎たらば」畏るべきもの何かあらむ、と宣言したのほただしき精神科学である。

「からからと笑ひ」つつ

「世にも快げなる気色」にて

戦死を遂げてのこしし「庭訓」——

「一族若党の一人も死に残つて有らむほどは」と

「涙を流し申し含めて各東西に別れにけり」

別るるはつながるために別るるのである。

「命を兵刃に落して名を後代に残すべし、これを汝が孝行と思ふべし」と

「孝行」とは「戦死する」すなはち永久の生命に生くることである、と教訓するのである。

戦死する戦場は「人生」である。

見よ、

しづかに別れて

しづかに飛び立ちゆく

特別攻撃隊青年勇士を。

緩舒の旋律

急迫の節奏をつつんで

あたりを領する深淵の沈黙、

天地をその中枢モナカに繋いで

人生最後の意志を一途に傾注し

最期サイゴの寂靜ジャクシヤウなることを直接経験する

征きて還らぬ特別攻撃隊青年勇士らよ、

君らの生涯は短かかりしも

その生命セイメイは民族の子孫ソンの生命セイメイにつらなり

祖国永遠の生命にいだかれ

天壤無窮の皇運を扶翼しまつらむ。

君らは出陣にのぞみ

確実に

永久生命を

直接体験するが故に

短かき一生も

限られたる生命も

悠久の思ひと

一つなるべし。

生命も

人生も

つひに一念である。

一念連続しまた連繋して

悠久の生命を現成する。

最後の一念に

宇宙の生命

日本にあつまり、

日本をしろしめす

天皇陛下にささげまつる

み民のいのちのうち

万有の法則

現実の感覚となる、

この時に

唱へまつる

天皇陛下万歳。三唱

靈につぐ

ひたすらにかなしむものはさいはひなるかな  
そのひとのいのちはほろびざるがゆゑに

一月三十日味爽マイサウ

一人家を出でてヒトリ

御社にまうでたりき。ミヤシロ

大前にすすみてオホマへ

礼拝黙念すればライカイ

## 地上の物象

眼前に静止して

神域の輪廓明かなりき。

二月十四日 蓑田速夫君より

「二月三十日、父は安らかに死の途につきました」といふ悲報に接し

一月三十日、その日こそ一人御社にまうでたりし日なりしことを思ひ出しぬ。

わが家より、北より南に通ずるみちを一人さびしくわれは行きき。

支那事変大東亞戦争に進展し

世を挙げて「新体制」をとらむとして弁証法的思惟の魅力圏に繫縛せられ

「背私向公」の聖語にしたがはず「滅私奉公」といふ如き表面尤もらしく裏面に虚偽

をひそめたる標語が横行し、

相寄り離れがたき自他を思はず

他を非自己とし唯我独尊他を否定する排他精神を以て簡単に「必勝」の原理とし、たとへば

北条時宗の「偶中」を必然と轻信し

本居宣長の著作の分量に眩惑せられてその排他主義の未熟なるを看過し

日本語の抑揚をもよくせざる軍服政治家の独裁、幕吏の如く威張る官僚の独善をかけた  
では苦条をいひつつもつひにこれを放任したることは

かへり見ればわれら全国民の忠誠の足らざりしことであり

身をすてて国事に奔走したる明治維新の志士を思へばまことに恥づべきことであつた。

此の間にあつて<sup>カン</sup> 義田胸喜君、君こそは明治維新の志士を思はしむるものがあつた。

われらが荏苒三十年苟安を貪りつつ時を失ひ機を逸しありしあひだに君は奮然挺身筆を劔として国難に赴いたのであつた。

「実学」は君の信念であり人生観であつた。

君の卓抜なる論理学は常倫を超出したる稀有の殊能であつた。

君の論理学の利刃の向ふところ誤謬は指摘せられ、虚偽は追及せられた。

ここに於いて「国体明徴」運動の正系は直接行動の暴力主義に陥ることなく学術的基礎を確立して、知識層に畏敬せられ、世間に信用せられたのである。

終戦後の今日全国民が国体護持の一念に徹到して

それによつて、またそれによつてのみ、日本に於けるデモクラシーを実現しうべしとするのは、学術的国体明徴運動の効果であつた。

永遠の平和は完結することなき不断追求の目的であり、捨身求道の学術的研究の問題

である。

君の著作は君の自伝であり、君の研究対象は悠忽無常シユクコツの人生であつた。

それは国家と民族とその運命をともしにするものであり、武器戦と同じく人生の悲劇そのものであつた。

戦局危急、旋風は全国民の台所にまで迫つた時、君は君の健康を害し、君の戦場であつた此の世を去つたのである。

いま世上には「無礼」を綱領とする徒党がジャーナリズム、ラジオのささ波にのつて蔓延してをる。

しかしながら善も悪も大量的なる空中楼阁大都市の外では人はいまだ大地をはなれず「無礼」は民意をとらへ得なかつたのである。

現下の国民の見聞は新聞とラジオとによつて歪められてをる、

しかしながら宇宙の真中モナカに通ずる人心の奥秘はまだそのままにのこつてをる。

しかるにこの情操を遺ワスれたる一部の知識層といふものは厄介のものであり、それ故に現代の「教育」は革新を必要とする。

元來迷信といふものは人間の存するかぎり絶えぬもので、人間が生きてをる、ということとは迷つてをるといふことである。

啓蒙とか、科学的とかいつたところで、人間の知能には限界がある。それ故に生きてをるといふことは完結しないといふことである。

現代の文明も知的迷信の打破を必要とし不断の進歩、無窮の維新を行はねばならぬ。それがデモクラシーの原理であり、独裁の不可なる所以である。

この迷信打破の諸形態は政治であり、宗教であり、芸術であり、それらの方便としての定期刊行物等である。

かう考へると概念弁証法といふものが知的迷信の模型であり、日本の知識層が弁証法

的思惟を以て「科学的」であると輕信したことは、日本が敗戦の憂き目を見た綜合的原因である。自分が完全だと思ふ時に行き詰るのである。「天皇絶対」といふのは「自己絶対」をその経験内容としてをるのである。「科学する」とか唱道したのはマルキシズム信仰と同程度の間違で、「無敵海軍」は何故に敗れたか、と反省することが必要である。全国民はものを正しく実感信知するを得なかつたのである。マチガヒ充滿の和歌が東京大新聞紙上にところせく掲載せられて世間で怪まなかつたのは不吉の前兆であつた。

人間は愚痴のものであると実感した親鸞は正しいデモクラシイの主張者であつた。賢とか愚とかいつても実際には区劃がつかぬもので、人間は「共是凡夫耳」と垂示せられた思想系統を究尽しつづけることが必要である。

われらはこの点に氣附いて弁証法的迷信の打破につとめたもののその微力は無力にひとしく、まごまごしてをるうちに

二十年八月の大破滅に陥りしときはわれらもまた「必勝」等の概念に執着する群衆の中に自己を見出したのであつた。

この時生命の連絡が断たれて、われらは烏合の衆となつたのである、今もその連絡が断たれては繋り、繋りては断たれつつある。

生命の連絡が断たれば、個体は生きてを つても、国民又は民族としては死に瀕してをるのである。そこで道徳が頽廢し、世は闇となる。その無秩序が「自由」であり「デモクラシイ」であるとする徒党も出沒する。

八月十四日終戦の詔書は下つたのである。承詔必謹、幾百万の軍隊は武器を捨てて全国民は天地アメツツチの始めてひらけし時に溯り、太古薄明の時代をあてどもなく手さぐりし  
つつ

見えざる力にひかれて歩みつつあるのである。

宇宙は人心の投影である。ひたすらに悲むものにとつて宇宙はその心に深く沁み入るのである。

悲むものはさいはひなるかな。その人の現実の感覚はさながら万有の法則となり、万物はその人のいのちにつながる。随順シゲグチニナムゲの信楽シゲグチニナムゲ円融無礙である。それを「神のまにまに」といふ。すなはち神ながらのみちであり、その体験のままに、思ふこと思ふがままに表現するのがシキシマノミチである。このおなじきみちをもるともにゆく時、人の心は相ふれて、ここにはらからの心はつながるのである。

地上の境界は現世の秩序であるが、この制約のもとに円融無礙の世界、へだてなき久方の空、天津御空の時代、神代シゲグチが実感せらるるのである、悲むものの心に。

神代とは人生の悲劇であつた。されば人生の悲劇はすなはち宇宙の歎喜、宇宙と人生との融合である。人の心に無窮の生を実感するのである。滅よりわきくる大歎喜である。寂滅為楽、終りて復た始るのが永生である。それが復活である。君は示寂、

永生に入り給ひぬ。蓑田胸喜君、君の靈とともに、われらは三界万靈をとぶらむ。  
む。

われらは列をなして大地をふみ、み空を仰ぎて、ふるさとに帰りゆかむ、人の知るところとく戦死者の靈もまた帰り来るのである、そのふるさとに。

過去現在未来の、また敵味方の、すべての戦死者の靈をまつらむ、君の靈とともに。われらもろともに心のふるさとに帰りゆかむ、ともしびをかかけ、花をそなへ、水をそそぎ、いのちをつなぐくさぐさのものをささげ

高らかにのりとごとまうさむ、心にうかぶままに、すなはち神のまにまに、神ながらに、「自由に」のりとごとまうさむ。

この時、きけ、宇宙にみつるひびきを、心にふるるかなしみを、ゆらぐいのちのつながるひびきを、天地アマツチのあらむかぎりは、よろづよにたえせぬひびきを、

義田胸喜君、君の靈よ、耳かたぶけよ、宇宙にみつる、ゆらぐいのちのつながるひびきを、天地のあらむかぎりはゆらぐひびきを。君の生は不滅である、不滅のいのちにつながるゆゑに。

## 石にしるすことば

ココニオカレタル

コノ石ハ

天地ノアヒダニアリテ

天地ニツラナリテ

ココニアリ。

コノ石ニ

コトバラシルス。

人ハ死スレドモ

コトバハ生キテ

イノチヲツナグ。

コノツナガリハ

地上ノサカヒヲコエテ

ヘダテナキ宇宙ニヒロゴル。

コトバコソ

カギリナキ生命ノシルシナレ。

イマソノコトバヲシルス。

ワガイノチノシルシナリ

ココニシルスヤマトコトバハ。

(昭和二十一年九月九日)

## あさ日の光

その心いたくかなしむ時

人はつひに死を思ひ

生の束縛を破つて進まむとする時

有限のからだは無限の宇宙につながる、

かくの如く人のからだもいのちも

有限なるが故に無限である。

悲みのそこひにまことの生を生くる時

心はからだであり

からだは心である。

悲みは喜びであり

喜びは悲みである。

明暗交代して

生命は空間に展開し

ここに花開き

ここに鳥歌ふ。

宇宙意志は生くるをたすくるころばせ——

いつくしみである。

いつくしみのみなもとは

み空にまろがれる光のみなもと、

それはまた、ことばのみなもとである。

ことばはころばせあり

こころはことばである。

宇宙につながる

ことばのしらべは

ただしき「うた」である。

人のからだよりその心を光照することばこそ

人間の解放者である。

ことばはかくの如くハタラクである。すなはち

ことばは仕事シゴトであり

仕事はことばである。

従業労作もことばである。

うつりかはる無常人生の

人々の生活を宇宙につなぐ

しらべ妙なることばよ、

人々の生活をその隣人につなぐ

いそしみつとむるしごとよ、

人々のからだは宇宙であつた、

それは無限の自然であつた。

宇宙につながるは宇宙である。

人の苦みを救ふことばよ、

ことばこそいのちのみなもとであつた。

ことばによつてからだもすくはれ

ことばによつてところもすくはるる——

からだところと一つになり

無限の宇宙に没入して

世にあるすべては

まろがりて一つとなる。

一つとなれば消<sup>ケ</sup>失<sup>ク</sup>せつつ

無限のいのちにをさめられて、またあらはるる

豊栄のぼるあさ日のひかり

くもりなきあさ日のひかりまばゆきかな。

(昭和二十五年六月)

## 友に

イママトキイタル

世界ノハラン

ココニアソクタイシテ

アセノモシ

イマコソクオチタマフ

無量ノ事ヲ多ク

タマヘ

コノミチノタメニ

カクイヘリ

カク信ゼン

(昭和二十七年六月)



## 著者小伝

明治十六年十月十六日、甲府市西郊、松島村（現在の敷島町）長塚に三百年伝来の旧家三井梧六の長男として出生。一高を経て東大国文科卒。正岡子規没後の根岸短歌会に入り、伊藤左千夫の「馬酔木」の後をうけて「アカネ」（後に「人生と表現」と改題）創刊、新聞「日本」の後をうけし半月刊誌「日本及日本人」に歌を選び詩歌論文を寄稿、私立中学教師と雑誌経営、文壇活動を併行せしめ在京五年。「名も無き民の確信」に立ち「親鸞を生みし日本の世界的使命」を説き、「祖国民衆主義」をひっさげて俗流民本主義と激闘、ゲーテの芸術とヴントの学術を併せて文献文化史的批判を時代思潮に加へ、「世界文化単位日本」の信を確立して広く各界の同志諸友と戮力、歌壇文壇を始め無自覚唯物論の横行する言論思想界廓清のために日夜筆力をつくすこと多年。大正末より昭和期に亘り「明治天皇御集」に心を潜め、シキシマノミチの開拓宣明を己が承命の任とし、「御集」拜誦を全国民の宗教儀礼たらしむべしとして諸友と共に「しきしまのみち会」を結成、同志養田胸喜と共に「原理日本」誌に拠り「政治革命あらざらしむるための思想學術改革」に献身、また甲府中江口俊博校長の「手のひら療治」運動に参与し、「神祭る昔の手ぶり」と結んでタナスエノミチの弘布に従事。大正四年郷里に帰りて以来、或は村会議員、或は村長として居村自治の中心となり、大東亞戦争に四兒を送ってその半ばを失ひ自らも病床に倒れつ

なほペンを放たず、永訣の書として「今上御歌解説」及び「平和の大海にそそぐ一滴の水」を述作。昭和二十八年四月三日没。生前刊行の著書に詩集三卷「消なば消ぬかに」(明44)「祖国礼拝」(昭2)「日本の歓喜」(昭16)、研究評論集として「明治天皇御集研究」(昭3)「手のひら療治」(昭5)「しきしまのみち原論」(昭9)「和歌維新」(昭17)「親鸞研究」(昭18)「三条実美論」(昭19)等。没後、有志の出版として、書簡集「無限生成」(昭32)「三井甲之歌集」(昭33)「三井甲之存稿——大正期諸雑誌よりの集録」(昭44)等あり、「全集」の出版を待望せられつつある。

三井甲之詩選

印刷代謄写

昭和四十九年四月三日印刷

印刷者

山梨県中巨摩郡敷島町長塚

三井 広 人





